

ふろくで 撮り ました。



文/胡口桂子



雨の日の自宅デッキの光景。水というのは
思いのほか臨場感を感じさせる。
ピンホール 広角/ISO400/カラーフィルム/5秒



がらくた市で買った昔の陶製の人形。兵隊さんが馬
に乗っている。逆光がきれいだった。この場合はむ
しろピントの甘さが、何だか月の砂漠的な雰囲気を
醸成してくれた。ピンボケロマン。ものは考えようだ。
ピンホール 標準/ISO400/カラーフィルム/3秒

赤瀬川原平さん



『神様の針の目』

文・赤瀬川原平

ピンホールカメラの不思議は、レンズがないのに写真が撮れること。カメラはレンズだ、と思い込んでいる頭には、ピンホールカメラは何だか奇蹟の小道具みたいに見える。

でも考えてみたら、レンズは透明なガラスである。一方のピンホールの孔は透明な空気である。ガラスと空気の違いがあるとはいえ、透明体であることでは同じなのだ。

そう思って納得した。この世の中には空気が充満している。ということは、レンズが充満しているのである。

さて納得したので、渡されたピンホールカメラであれこれ撮ってみた。何しろ全自動じゃなく全手動のカメラなので、次々と失敗をする。巻き上げを忘れて二重写し、チャージを忘れてもたもた、それでもフィルム一本の途中からだ

あかせがわ・げんべい/画家・作家/1937年、神奈川県生まれ/ネオ・ダダ・オルガナイザーズ、ハイレッド・センターなどのグループを結成し、コラージュや梱包などによる奇想天外な作品を発表。保守的なアート界に痛快な風を吹かせる。活動は多岐に及び、『桜画報』におけるイラストレーション、あまりに面白い路上観察学、また、尾辻克彦名義では小説『父が消えた』で第84回(81年)芥川賞を受賞。『ライカ同盟』などカメラに関する著書も多く、2000年には写真集『ブータン目撃』(淡交社)も上梓した。ピンホールカメラによる撮影は今回が初。

わずか0.3ミリの針穴から

入る光量を決めるのは“時間”。

その場限定の偶然が、私たちに

教えてくれるのは一体なんなのか。

いつも急いでいるあなたに

こんなカメラはいかがですか？

ここで紹介する6人の大人たちも、

いつもとはちょっと違う

時間の流れの中で、

小さな針穴から

世界を覗いてみました。

んだん慣れて、後半はうまく進んで撮り終えたが、巻き戻しに焦ってカメラ内部でフィルムがちぎれ、見事失敗。

その失敗を肝に銘じて、二本目からは焦らず慎重に、うまくいった。

ただし露出が難しい。露出計で測ってあれこれなんて出来ないのだから、これはまず実際にいくつか撮ってみて、その結果を参考に工夫していくしかない。

実際にやってみて、シャッター時間の2秒も5秒も10秒もそれほど変わらないのがちょっと不思議だった。

露出はそうやってシャッター時間をいくつか変えれば、どれかが当たる。問題はピントである。これはもうレンズがないからいじるわけにもいかず、ただひたすら感光した状態を

受入れる。

ふつうのカメラ感覚では、どうしてもピンボケだ。でもそれ以上は望めず、そこがちょっと辛い。このところ老眼が進んで目が霞むが、カメラまでいっしょに老眼になったみたいだ。

ファインダーもまたのぞき方でアングルが変わるから、どうにも心もとない。カメラを向けて、まあだいたいこの方角、という程度で撮る。だから霞んだ目に手探りで対象をつかみに行く感じで、もどかしかった。

でも裏返せば、いよいよ神の目に近づいたという感じでもある。人工物のレンズなしで、ただの空気を通して現像される風景。そういうもとの神の目の手助けとして、フィルムを巻き上げたり、カメラの方向を変えたりしているわけなのである。



被写体のクモの動きで、クモの巣が飛び散った光のようにも見える。
ピンホール 標準/ISO400
/カラーフィルム/2秒



夏の名残一セミの抜け殻を静かな海をバックに撮影。
ピンホール 標準/ISO400
/カラーフィルム/2秒

カマキリとカメラとの距離はなんと10cm。ここまで接写してもバックにある車などピンボケの程度が均一なのはピンホールカメラの特性。
ピンホール 標準/ISO400
/カラーフィルム/2秒

ふろくで
撮り
ました。



くりばやし・さとし/昆虫写真家/1939年、中国大陸生まれ/独自に改造したカメラと斬新な技術で様々な昆虫マクロ写真を発表。2000年、『草間の宇宙』で第41回科学技術映像祭内閣総理大臣賞受賞。翌年、週刊現代ドキュメント写真大賞ネイチャー・フォト部門賞受賞。「クリビジョン」と名付けられたこれらの写真は、昆虫と同じ視点、つまり昆虫そのものの視点であるかのような衝撃と感動を与えるものを与えている。

栗林慧さん

『ピンホール in クローズアップ』

そうだ、ピンホールにはピンがない。だから、どんなに対象に近づいても俗に言う“ピンぼけ”はありえない。昆虫の視点を追求し、ありえない超接写撮影を可能にしてしまった栗林さんは、これをどう見たのか。「ピンホールは被写界深度が極度に深い(パンフォーカス)ので興味を持っていました。ワーキングデ

イスタンスを約10cmに置いた接写でも背景の抽出が可能……これはユニークな写真になるのでは!? と思いましたね」

結果はご覧の通り! クリビジョンならではの超接写に、ピンホールならではの味を加えられた。「露出のラチチュードが非常に広いことも特徴です。晴天時、ISO400で1~5秒でした。既存のフィルムで

次々に撮影できるし、シャッターも付いていますから、きっと通常のカメラと同感覚で撮影できますよね!」しかしながら、チャージを何度か行っている間にシャッターユニットがゆるんで露出が台無しになるという、このカメラならではの“ご愛嬌”もあったとか。小さな穴から小さな生き物たち。カメラも昆虫も栗林さんの手を通ったとき、優しい愛嬌を振りまいてくれた。